

オグリキャップが駆け抜けた時代

オグリキャップが競走馬として活躍した時代(1987年～1990年)、日本は株式市場で株価が上昇、不動産市場では地価が上昇するなどバブル景気の真っ只中。政治・経済の面では国鉄が民営化されJRとなり、消費税の導入。大都市圏では都市再開発が進み、地上げが問題となっていた。世相を見ていくと、栄養ドリンクのCMソング「24時間戦えますか」というフレーズが流行語となるような時代だった。一方競馬の世界に目を向ければ、1987年(昭和62)に武豊騎手がデビュー。JRAの広報戦略や若手騎手の活躍もあって女性の競馬場への来場者数が増加。売得金額も右肩上がりで見え

こへオグリキャップの中央競馬への移籍。そのひたむきな走りや中央競馬のエリートたちに打ち勝つ姿はファンの共感を呼び、ハイセイコー以来の競馬ブームが到来した。競馬を知らない人達にもその名前は浸透。オグリキャップのぬいぐるみは爆発的な売れ行きを見せるなど社会現象を巻き起こした。オグリキャップは時代を象徴する存在として駆け抜け、今なお多くの人々の記憶のなかに残っている。



血統

父	※ダンシングキャップ(米) Dancing Cap 芦毛 1968	Native Dancer 芦毛 1950
		Merry Madcap 黒鹿毛 1962
母	ホワイトナルビー 芦毛 1974	※シルバーシャーク(愛) Silver Shark 芦毛 1963
		ネヴァーナルビー 黒鹿毛 1969

※は輸入馬



プロフィール

牡 芦毛 1985年(昭和60)3月27日～2010年(平成22)7月3日
馬 主 (笠松)小栗 孝一氏 → (中央)佐橋 五十雄氏 → 近藤 俊典氏
調 教 師 (笠松)鷺見 昌勇 → (中央)瀬戸口 勉
騎乗騎手 (笠松)青木 達彦、高橋 一成、安藤 勝己
(中央)河内 洋、南井 克己、岡部 幸雄、武 豊、岡 潤一郎、増沢 未夫
生 産 者 稲葉 不奈男氏(北海道三石)
主な勝鞍 1988年(昭和63) 有馬記念[GⅠ]、ニュージーランドトロフィー4歳S[GⅡ]、高松宮杯[GⅡ]、
毎日王冠[GⅡ]、ペガサスS[GⅢ]、毎日杯[GⅢ]、毎日放送賞京都4歳特別[GⅢ]
1989年(平成元) マイルチャンピオンシップ[GⅠ]、毎日王冠[GⅡ]、産経賞オールカマー[GⅢ]
1990年(平成2) 安田記念[GⅠ]、有馬記念[GⅠ]
競走成績 地方:12戦10勝 中央:20戦12勝

JRA競馬博物館

〒183-8550 東京都府中市日吉町1-1 JRA東京競馬場内
TEL:042-314-5800 <http://www.bajibunka.jrao.ne.jp>



交通のご案内

- 京王線 府中競馬正門前駅から徒歩約7分 東府中駅から徒歩約10分 府中駅から徒歩約18分
- JR南武線・武蔵野線 府中本町駅から徒歩約18分
- 西武多摩川線 是政駅から徒歩約20分



JRA競馬博物館



企画展

オグリキャップ —今甦る芦毛の怪物—

©H.Imai/JRA

会 期	2022年 4月23日(土) ▶ 10月2日(日)
開 館 時 間	10:00～17:00 (競馬開催日及びパークウインズ日) 10:00～16:00 (その他の日)
会 場	JRA競馬博物館 2階展示室3
会期中の休館日	月・火曜日(祝日は開館し、直後の平日が休館) ※6月29日(水)～7月8日(金)は館内整備のため休館
入 館 料	無料(但し東京競馬開催日は競馬場への入場料が必要)

※東京競馬開催日(4月23日(土)から6月26日(日)までの土曜・日曜)のご来館には東京競馬場指定席または入場券の事前予約が必要となる可能性があります。

主 催 公益財団法人馬事文化財団



オグリキャップ馬主服



1988年(昭和63)
第2回ペガサスS(GⅢ)



1988年(昭和63)
第6回ニュージーランドトロフィー4歳S(GⅡ)



1988年(昭和63)
第18回高松宮杯(GⅡ)



1988年(昭和63)
第39回毎日王冠(GⅡ)



1988年(昭和63)
第33回有馬記念(GⅠ)

昭和の終わりから平成にかけて社会現象ともいえる競馬ブームを巻き起こし、競馬そのもののイメージさえも変えたオグリキャップ。日本がバブル景気に沸いた時代にファンの心を鷲掴みにしたその走りとドラマチックなフィナーレは今なお語り継がれています。本展では、芦毛の怪物と呼ばれた同馬の蹄跡を振り返ります。

地方から中央へ ― 伝説のはじまり ―

1985年(昭和60)3月27日、北海道三石郡三石町(現日高郡新ひだか町三石)の稲葉牧場で1頭のサラブレッドが誕生する。のちに日本全国に社会現象を巻き起こすことになるオグリキャップである。以前から縁のあった笠松の鷲見昌勇厩舎から1987年(同62)5月19日、笠松競馬場でデビュー。1988年(同63)1月10日ゴールドジュニアに勝利するまで通算12戦10勝の好成績を収め、栗東・瀬戸口勉厩舎へ移籍。3月6日のペガサスSで中央競馬デビュー戦を勝利。クラシックレースへの登録がなく、皐月賞や日本ダービーへの出走は叶わなかったものの、毎日王冠まで重賞6連勝。この頃には既に怪物として競馬ファンの圧倒的な支持を受ける存在となっていた。芦毛対決となった天皇賞(秋)でタマモクロスに1馬身1/4差の2着と敗れ中央初黒星を喫し、続くジャパンカップでもペイザバトラー、タマ

モクロスの後塵を拝し3着と敗れたが、タマモクロスとの3度目の対決となった有馬記念では岡部幸雄騎手の手綱で優勝、過去2戦の雪辱を果たした。

高まる熱狂 ― 記憶に残る激走の数々 ―

4歳となったオグリキャップは有馬記念後、右前の繋靱帯を傷めたこともあり福島県いわき市の“馬の温泉”で温泉治療を行い春シーズンは全休。秋に復帰しその初戦となった産経賞オールカマーを快勝。続く毎日王冠ではイナリワンとの激しい叩き合いをハナ差で制した。そして迎えた天皇賞(秋)。前年の雪辱が期待されたが、勝負どころの坂下で前をカットされる不利もあり、スーパークリークの2着に敗れた。ここからオグリキャップは誰もが驚く驚異的なローテーションで戦いを進めていく。中2週でマイルチャンピオンシップに出走。早めに抜け出したバンブーメモリーを持ち

前の勝負根性で追い込み、ゴールの瞬間ハナ差差し切って有馬記念以来のGI制覇。そして連闘で臨んだジャパンカップ。今度はニュージーランド代表のホーリックスとの激しい一騎打ちとなり、世界記録での決着となるなかクビ差の2着。この2戦は歴史的な名勝負として今も語り継がれている。秋6戦目となった有馬記念はファン投票1位で選出されての出走となったが、精彩を欠き5着と敗れ、この年のオグリキャップの戦いを終わった。

奇跡の復活 ― 国民的ヒーローの大団円 ―

そして5歳、温泉療養からの復帰初戦は安田記念。武豊騎手との初のコンビとなったが、天才と怪物の組み合わせは驚きをもって報じられた。好スタートを切り2番手につけたオグリキャップは直線馬なりのまま先頭に立ち快勝。ファンの期待に応えた。秋にはアメリカ遠征も計画され前途洋々と思えたがそこから歯車が狂い始める。宝塚記念では直線伸びを欠き2着。脚部不安による休養を経てぶっつけ本番で臨んだ天皇賞(秋)、ジャパンカップは増沢末夫騎手の鞍上で臨んだが、6着・11着と敗れ、本来の姿とは程遠いオグリキャップに引退を望む声が各方面から上がった。そうしたなか陣営

はここを引退レースにと有馬記念への出走を決め、そのパートナーに再び武豊騎手を指名した。その日中山競馬場に詰めかけた17万を超える大観衆が見つめるなか、オグリキャップはスローペースにも折り合い、4コーナーをまわって先頭にたつと、大観衆の絶叫に近い歓声の中、ホワイストーン以下を抑えて優勝。ウイニングランで引き上げてくるオグリキャップと武豊騎手にスタンド中から“オグリコール”がこだましていた。

引退後のオグリキャップ

現役引退をしたオグリキャップは1991年(平成3)1月に京都・笠松・東京と3つの競馬場で引退式を行った後、北海道新冠の優駿スタリオンステーションで種牡馬生活をスタートさせた。因みにこの年JRA顕彰馬に選出されている。種牡馬としては期待されたような結果を残すことは出来なかったが、引退後もその人気は衰えることはなく、多くのファンが見学に訪れた。また2008年(同20)には東京競馬場に元気な姿をみせたこともあった。いつまでもヒーローでありつづけたオグリキャップは2010年(同22)7月3日、その生涯を閉じた。放牧中の右後肢の骨折が原因で突然の訃報だった。



1989年(平成元)
第35回産経賞オールカマー(GⅢ)



1989年(平成元)
第40回毎日王冠(GⅡ)



1989年(平成元)
第6回マイルチャンピオンシップ(GⅠ)



1989年(平成元)
第9回ジャパンカップ(GⅠ)



1990年(平成2)
第40回安田記念(GⅠ)



1990年(平成2)
第35回有馬記念(GⅠ)